

10年ほど前だっただろうか、トレーニングがてら登った金時山頂上から富士山の写真を札幌の友人にメールした。暫くすると返信があり添付があった、私も見たことがあった世界遺産のマチュピチュ遺跡を俯瞰した写真だった。標高2400M！我が現在地の倍の標高に彼は立っていたのだ。その時から一度は行ってみたいと思い始め、漸く実現しようとしている。

台湾にも行きたかったが、健康寿命を考慮しメキシコシティ経由の『7つの世界遺産を巡るマチュピチュとテオティワカン8日間』のツアーに変更した。ツアーは雨期も終わり乾季が始まる季節を選んだ。

日程表を見るとメキシコシティ迄1万1千数百キロ12時間半～14時間、更に首都リマまで空路南下すること6時間。思わず家内と顔を見合わせてしまった（見つめ合ったのではない）。遠い！挫けそうだ。B787は炭素繊維を多用しているので航続距離が長くなり北米東海岸まで飛べるらしい。機内気圧、湿度も高目に設定できる機種だ。外務省海外安全情報ではメキシコ、ペルーは「レベル1」。感染症危険情報のジカウイルス感染症発生は両国とも「レベル1」。この情報は家内には話せなかった。ネットで調べると10日前マチュピチュ行きの列車が頻発しているストの影響で運行休止になり、ツアー客が夜間数時間歩いたらしい。ご免こうむりたい。更に昨日ペルー北部でM8の地震発生！H交通社に問い合わせると、それでもこのコースは催行するという。旅行保険の細かな字迄読みジタバタしたものの、腹をくくった！

2年前のスイス旅行の際には睡眠導入剤を服用したが機内でよく寝られなかったもので、より強い睡眠薬を掛かりつけの医者処方してもらった。これがまずかった！睡眠薬は呼吸数を減らすので高山病を誘発するという。後の祭りだ。一泊目はメキシコシティ2300m前後、スイスでは大丈夫だった家内が消化器をやられ食事が摂れない。私の方は寝られない。頭痛、吐き気、腹痛、食欲不振、不眠の症状は高山病だ！家内は3泊目のマチュピチュでやっと快復した。ツアー仲間にも同じような症状の方がいた。

現メキシコシティにはスペインに侵略され破壊された都市や琵琶湖の3倍の湖沼を埋めた土地なので地盤が軟弱だ。世界遺産のサントドミンゴ教会などは床が波打って眩暈がしそうだ。教会周辺の建物もピサの斜塔のように傾き、隣り合った建物にお互いが寄りかかっている。教会の外には3～4人の昔懐かしい靴磨屋が並び、広場では警官の号令と靴音が響く。空港に繋がる地下鉄は安全らしいが、バスはオイハギが出没するという。夜間移動バスの車内灯は消され窓のカーテンは下ろされた。高校同期生が4年間当地に単身赴任していたので危険情報を聞いてみると水質が悪いので生野菜、水道水、氷、コップまでも注意しろと言われた。お陰で？腹具合は大丈夫だった。

2回目のフライトは6時間でも短く感じた。夜海沿いの首都リマに入った。質素なホテルだからか、トイレでは落とし紙は流さずゴミ箱にと指示された。Caリッチの水なので排水管が詰まるそうだ。翌朝ホテル前には土産売りの老女、向いには二人の白バイ警官が物々しい。列車に乗せられないスーツケースをホテルに預け、2泊3日分の荷物をリュックに詰め空港に向かった。空港に近づくと道路は渋滞、車の窓拭き屋、物売りが車の間を縫って忙しそうだ。最近の彼らは経済破綻したベネズエラ人が目立つとか。ペットの水で窓を洗われた運転手は嫌がり



もせずチップを渡す（30～40円）。歩道上には数張りのテント、遠方から来たデモの人々の宿泊所だ。それが日常の風景らしい。日本人は満ち足りているのか、平和ボケか、最近国内でデモは少ない。

1時間半のフライトで標高3400mの古都クスコに着陸。空港ロビーにコカの葉が籠に盛られていたので一掴み失敬した。コカインの原料にもなるが高山病の予防にもなると言う。口に含んでいるとある種のハーブ茶の様な味がしてくる。少し歩みを早めると息が切れる。一瞬「ピエール滝」が頭をよぎったが今はコカの葉が頼りだ。小学生ぐらいの女の子の土産売りが寄ってきて離れない。値切って『アミーゴプライス』にさせる交渉も旅の楽しみだが、彼らの生活に思いをはせると値切れない。リュマのキーホルダーを2束2ドルで買った。

高山病を避けるためクスコには泊まらず、バスで2時間80km、標高の低いオリヤンタイタンポ駅に向かう。悪路なのにバスの身ながら追い越し数回、シートベルトが命綱に思える。車内のツアー仲間はグッタリ寝ている。知らぬが花だ。タイムスリップしたかのように懐かしの三輪車「ミゼット」と度々すれ違う。

2時間半後オリヤンタイタンポ駅でディーゼル列車に乗り換えた。ホームから見るレールは細く、枕木も有るか無きかで以前の脱線事故の記憶が蘇り左右の揺れが気になる。昼間だと車窓から万年雪を頂く5km級のアンデスの山々が望めるそうだ。漆黒の傾向沿いを100分、やっと終着駅マチュピチュだ。標高2km、クスコより身体は楽だ。21時過ぎ駅近の質素だが清潔なロッジに着く。エアコンも無いが寒くはなかった。嬉しい連泊だ。



翌朝尻が痛くなる程の悪路をバスで30分、標高2400mの遺跡入り口に到着。各国の観光客でごった返している。遺跡は時間4百人一日3千人迄の入場規制がある。クスコからの現地ガイドは日本で7年間歌手だったインカの血を引くイケ面37歳。大学出のインテリ。『スペインが奪略し返還されたのは銅製品ばかり、金銀製品は何故か返還されてない』皮肉たっぷりだ。

快晴だ、熱中症になりそうな暑さだが湿度は低く汗は出ず日陰は涼しい。太陽が北の天空に輝くのが直ぐには理解できない。南半球なのだ。織豊時代の石工集団穴太衆も憧れそうな見事な石組み前で『過去の地震でスペイン時代のものは崩壊しても、インカの石組は残っている』インカの矜持を持ったイケ面ガイドが力説する。文字が無い文明でこの石の遺跡は驚きだ。数頭のリュマが草を食んでいる。眼下の細い川はアマゾン川源流だ。見上げるとかつての見張り小屋上に3061Mのマチュピチュ山（老いた峰）、振り返ればワイナピチュ2693m（ケチュア語で若い峰）。紫外線が目に肌に痛い。その晩はアルパカ肉を肴に地ビール、ピスコ酒（葡萄の蒸留酒40°）が乾いた喉を潤してくれた。美味しい！

深夜着、早朝出発が多いタフなツアーは21名60代が中心、ニューギニア、アイスランド、アフリカ、アラブ各国と、海外旅行慣れした方々が多く旅の話が尽きない。

ペルーで51カ国目の70代の粹なK夫人は何処でも何時でも寝られるそうだ！成田でのスーツケースには洋酒5本、タバコ2000本！毎回申告せず？通関する、外見と違う酒豪、愛煙家の可愛い猛者だ。私の方はメキシコ空港で廃棄したコカ飴、コカクッキー、コカの葉の残り香を麻薬犬に嗅ぎつかれないかビクビクしていたのに。

『お疲れ様です、間もなく成田空港です』と機内放送が流れる。にわかには寿司や蕎麦を食べたくなった。幸い未だコカの禁断症状は出ていない。

少しスリリングでタフな旅が、今終わろうとしている。

一期一会の別れを惜しみ達成感と旅の思い出に浸りながら、早朝の空港を後にした。